大きな百合の木の下で

IBARAKI UNIVERSITY NEWS LETTER

SPRING 2007 No.13
茨城大学ニューズレター

●特集 国際交流
●留学生センター紹介
●留学生が語る《ゼミ・研究室紹介》

2007

茨城大学
Ibaraki University

隣の山から眺める？

人文学部　助教授　中田　潤

私が専門とする歴史学を含めた人文・社会科学が、一体我々の社会にどのような貢献ができるのだろうかと問われた時、「現在我々が生きている社会がどのような構造によって成り立ち、またどのようなメカニズムによって機能しているのかを、我々に把握させる可能性」と答えるようにしています。少し考えてみると、実はこれはかなり困難な知的営みであることに気づかされます。なぜなら我々は、分析対象である社会の中で生活しており、また不断にこの社会から影響を受け、さらにこの社会に影響を与えながら生きているからです。

私の言わんとしていることをわかりやすくするために、以下のような例をいつも学生に紹介しています。「まさに今、頂上を目指して山を登っている登山者は、いかにして現在自分が山の中のどの辺に到達しており、頂上まで到達するにはどの方向に、どれ位登れば良いのか知り得るのだろうか。」山は我々が生きる現代社会のメタファーであり、登山者とはまさにそこに生きる我々を指していることは容易におわかり頂けると思います。

実際の登山では、現在の自分のいる地点から見える景色・地形と地図を照らし合わせることが最も確実なのでしょうが、現代社会の場合、それを遍く記した地図は存在しません。また不完全ながらも誰かが特定の視点からの地図の作成に成功したとしても、始末の悪いことにこの現代社会という山は刻々とその姿を変えており、その地図に従って進むことによって、かえって遭難してしまう危険があります。しかしながら実際の登山では、地図がなくとも山の全体像をつかむ方法は、実は色々ありそうです。例えば自分がどの程度汗をかいているのか、どの程度疲労しているのかによって、おおよそ歩いた距離を推測することは可能でしょう。また周りの植生を観察することによって、一定程度の知識があれば自分のいる場所のおおよそ標高や位置を推測することができるでしょう。また太陽の位置や風の吹き方や気温も同様に重要な情報となるでしょう。要するに周りの環境や自分自身に対する観察力が決定的になるわけです。

2005年に設置されたホロコースト犠牲者の記念碑（ベルリン）

アウシュヴィッツ強制収容所跡の入り口（オシフェンチウム）

現代社会の把握・理解にも同様のことが言えます。研ぎ澄まされた「感性」とそこから得られた情報を意味づけるための「知識」の両方が決定的に重要になってくるわけです。しかしながらこの研ぎ澄まされた「感性」というのは曲者で、誰にでも備わっているものではありませんし、私などもそんなものを持っていないと確信できる人間の一人です。

それでも方法はあります。山の例に戻れば、山の全体像をつかむために最も手っ取り早い方法は、実は山から下りて隣の山から観察することだと誰でも気づくと思います。つまり我々は、自らが半ば無意識に同化されてしまっている社会を、その内部から把握しようと苦闘するよりも、むしろそれを相対化するような別の視点を獲得すれば良いわけです。その最も手っ取り早い方法は、時間もしくは空間（あるいは両方）の軸をずらして我々の社会を見る、つまり外国からの視点もしくは、過去（未来からは無理ですので）からの視点を持つということです。語学の習得、世界の他の地域や歴史を研究するということを、このように我々の社会を外側から見るツールと考えれば、それに取り組むモティベーションも少し変わってくるのではないでしょうか。国際交流というものを、自分の生きている社会の構造をより深く我々に理解させてくれるものであると考えれば、もっと身近なものと感ずることができるのではないでしょうか。

ベルリンの壁沿いに設置されていた
監視塔跡（ベルリン）

「イースタン・ワシントン大学語学研修」

教育学部　教授　君塚淳一

二〇〇五年度から始まった「イースタン・ワシントン大学（以下ＥＷＵ）語学研修」は、二〇〇六年二月十二日より三月十日のほぼ一カ月間実施され、その準備と第一回引率者としての仕事をさせてもらった。ＥＷＵと茨城大学とは長年に渡り交流協定を結んでおり、また教育学部からは毎年学生が留学しているなど、もっと早く実現していても良かったプログラムであると思う。ＥＷＵで中心となって授業を企画していただいているのは、ここ数年、毎年、教育学部主催の「英語ワークショップ」などで水戸へも来られているＥＷＵのメアリー・ブルックス先生で茨城大学とのお付き合いも長い。

研修の内容は三週間の大学の語学研修と四泊五日のカリフォルニアの視察旅行というもの。大学では世界各地から英語を学びに来ている学生と同じレギュラーのクラスに入れてもらい、大学の講義についていけるだけの能力を身に付けるよう組まれている授業を受講する。二週目からは自分の授業の合間を縫って、むこうの学部生が受講する講義も聴講できるようお願いした。予習に課題と授業の準備は盛りだくさんだが、その間にもグループでプレゼンテーションするための取材にダウンタウンまで出かけて行くなど、かなりハードなスケジュールではある。

IPAの学生と共に

当然、夜遅くまで〈英語漬けの猛勉強〉となるが、参加学生は皆、口をそろえて〈充実していた〉と感想を述べてくれて大成功であった。

敢えて二月から三月に設定したのには訳がある。夏休みに語学研修を行う大学は多いが、休暇中であるとキャンパスには学生が当然いない。一方、この時期であればレギュラーの授業が行われているから、生き生きとしたキャンパスライフが堪能できる。それで既述の学部講義聴講も可能になったし、我々が宿泊する寮にも長期休暇ではないため学生がいる（寮宿泊に関してはアメリカ人学生とペアにしてくれた）。これで更に学生の英語を使う機会も増えるし、英語を学ぶモチベーションも上がり、今後長期留学を考えるきっかけにもなるだろう。

終了証授与式の後で

ＥＷＵ滞在中は、寮ごとに留学生をまとめるアメリカ人学生お世話係り（ＩＰＡ）が付いてくれる。彼らは分からないことや困ったことがあれば相談にのってくれ、様々なイベントを企画し誘ってもくれる。学生たちは放課後や土日、他の留学生たちと共に彼らと「映画」「パーティ」「大学対抗バスケットボールの試合」「ライブ」「スケート」「ロッククライミング」などなどと出かけてアメリカを楽しんだ。

このプログラムの一番の特徴といえば、三週間でありながら特別に〈茨城大学用に別に組んだプログラム〉ではないところが魅力といえるだろう。学生たちは各自大学のＩＤカードを発行してもらい、一般留学生と同様に扱ってもらえる。カードを使えば学内では決められた金額内での食事やショッピングもできる（更に必要があれば自分で追加も可能）、また市内のバスは提示すれば無料で乗り放題となる。休日には仲間同士でダウンタウンまでバスで映画、食事やショッピングに出かける学生も多くいた。

また四泊五日のカリフォルニア視察旅行も学ぶことは多い。いくつかの観光スポットに組み込み、みんなで訪れた歴史的な場所にも学生たちは熱心に目を向けていた。たとえばサンフランシスコの〈アルカトラズ島〉はかつての刑務所島。一九二〇年代のギャングのアル・カポネもここで服役し、映画『アルカトラズからの脱出』でも有名であるからご存知の方も多いだろう。またこの島に隣接する島はエンジェル島で、太平洋を渡ってきた日系をはじめとするアジアからの移民たちが通過したかつて移民局があった島（ちなみに大西洋を渡ってきた移民はニューヨークのマンハッタンの脇に浮かぶ自由の女神が立つリバティ島の隣のエリス島に移民局があった）。また最後に訪れたロサンジェルスのリトル東京にある〈日系アメリカ人博物館〉はアメリカの日系人社会の歴史（第二次大戦中の収容所体験や四二二部隊など）が学べる貴重なもの。巨大娯楽施設やハリウッドなどの〈光〉とイタリア系や日系など移民の苦労という〈影〉の部分も学んでもらえたかと思う。

ディズニーリゾート（カリフォルニア・アドヴェンチャー）にて

ともかく三週間でありながら凝縮された密度の濃い研修プログラム、機会があればぜひ参加されたらと思う。

ドイツ、フィリピンとの化学を通じた学術国際交流

理学部　助教授　森　聖治

私は、化学者として世界各地で国際会議に参加したり、海外の大学で講義・講演をすることが多くあります。最近主に渡航した国は、アメリカ、中国、ドイツ、フィリピンですが、ドイツとフィリピンとの個人的な国際交流の状況について簡単に記しましょう。

一．ドイツ

二〇〇五年の九月、サッカー・ワールドカップが開催されたドルトムント市にあるドルトムント大学のクラウゼ教授の研究室で、日本学術振興会特定国派遣研究者として、金属触媒による有機化合物の生成反応のメカニズムに関する研究を始めました。滞在期間は短かったのですが、有意義な議論ができました。現在もその共同研究を続けています。ドルトムントは、ライン・ルール工業地帯にある工業都市で、とくに、ビールはヨーロッパで第二位の生産高を誇ります。人口は五〇万人程度で、ドルトムントの近くにも、エッセン、デュッセルドルフ、ケルンなどいくつかの五〇ー六十万人規模の都市が集中しています。クラウゼ教授とのつきあいは、私が大学院生時代、研究内容に関連した研究を、彼が行っていたところから始まります。有機合成化学の分野では有名な人で、現在は化学の学部長を兼任しており多忙です。きまじめながら家族を大事にする心優しい化学者です。彼との共同研究はすでに五年前から開始していますが、学術交流をもうすこし発展させて行きたいと思っておりますし、近い将来、教員だけでなく学生同士の交流も進められたらと思っております。

2005年9月クラウゼ教授のグループとドイツ・ドルトムント大学で

二．フィリピン

フィリピンは、二〇〇三年九月、本学と学術協定を結んでいるデ・ラ・サール大学（マニラ市、私立）をはじめ、フィリピン大学ディリマン校（ケソン市、国立）、ホーリー・チャイルド・スクール・オブ・ダバオ（ダバオ市、私立）の訪問が初めてでした。ホーリー・チャイルド・スクール・オブ・ダバオでは、高校生を対象として「化学の不思議」という題名で授業を行いました。たぶん今でも稀な国際高校出張講義でしょう。その後、フィリピン化学会議に招待講演で呼ばれるなど、フィリピンの人々との交流が深まっています。

ミンダナオ大学イリガン工科校（イリガン市、国立）で二〇〇五年七月に、客員教授として大学院生向けの正式な講義「理論有機化学」を行ったとき、壮大な歓迎を受けたのは非常に感動しました。フィリピンの公用語としては、タガログ語のほかに、英語が用いられています。小学校から授業のほとんどで英語を使用しているため、フィリピンのほとんどの地域で英語が通じます。アメリカの与える文化の影響が大きい一方、日本とフィリピンの関係は深く、ニノイ・アキノ国際空港をはじめ、マニラ首都圏の鉄道（MRT、LRT）の建設などに日本のODAが貢献しており、フィリピン人の多くは日本に感謝しているようです。

ドイツ・フィリピンのいずれとの交流も、私の研究分野から始まっていますが、現地の人々とする話は化学だけにとどまりません。交流するためには、自分なりの意見が必要です。私としては、お金には換えがたい貴重な体験をしていると思いますし、今後もさまざまな国との交流を続けて行きたいと思います

2005年7月ミンダナオ大学イリガン工科校での講義後

日立キャンパスでの国際交流

大学院理工学研究科 助教授（留学生担当）
湊　淳

日立キャンパスでは、学部学生、大学院生含めて百二十名ほどの留学生が学んでいます。勉強、研究活動だけでなく、国際交流活動や地域との交流にも積極的にかかわっている留学生や日本人学生が数多くいます。日立キャンパスには、国際交流会、中国人留学生会、韓国部などの学生団体があります。これらの団体は、単独での活動だけでなく、お互いに協力し合いながら色々な活動を楽しんでいます。これらの団体には所属しないけれども毎回色々な行事に顔を出している学生も多くいます。また、地域の色々な団体も、留学生を色々な面でサポートしてくれています。

日立周辺で国際交流に関するイベントは数多くあるのですが、平成十八年度に行われた行事の中から、本学の学生が中心になって関わった活動のいくつかを紹介したいと思います。

六月三日のこうがく祭では、バングラデシュ学生会、マレーシアの留学生、チタラサインドネシアによる模擬店が出て、各国の料理などを紹介していました。また国際交流会による各国の紹介や、学生による国際交流パーティーが開かれました。パーティーでは、留学生、国際交流に関心がある日本人学生、留学生を支える地域のボランティア団体の人たちなどが参加して大いに盛り上がりました。

八月には第二十五回日中学生会議が日立市で開催されました。主催は日中文化交流財団と日中学生会議実行委員会で、いつもは東京で開催されるのですが、今回は二度目の地方開催都市として日立市が選ばれました。茨城大学の中国人留学生だけでなく、他の国の留学生や日本人学生も、環境問題に関するパネルディスカッションや交流パーティーに参加しました。

七月から十一月にかけて、日立二高で一般市民を対象とした「外国人から学ぶ異文化理解」という市民講座が開かれました。毎回一つの国について、各国の文化（料理、挨拶、衣装など）を学ぶものです。日立キャンパスの留学生も講師と招待され、母国の文化などを紹介しました。

九月に多賀駅周辺で行われるよかっぺ祭りでは、例年中国人留学生会が水餃子の店を出しています。美味しいとても人気があります。

十月十八日に日立シビックセンターで開催されたひたち国際文化まつりでも、日立キャンパスの留学生や日本人学生が大活躍していました。パネル展示による各国紹介では、中国、韓国、マレーシア、ベトナム、ポーランド、スリランカ、バングラデシュなどの出身の留学生がそれぞれの母国の紹介を熱心に行っていました。料理やお菓子の試食、お茶、民族衣装の展示など盛りだくさんの内容でした。

ひたち国際文化まつりの韓国ブースの前で、韓国留学生と中国留学生が仲良くツーショットです。

あなたも日立キャンパスで、外国人の友達を作ったり、エスニック料理を習ったり、異国の歴史、音楽、文化などに親しんでみませんか。交流に積極的にかかわっている日本人学生も、英語が得意な人ばかりではありません。英語がしゃべれない留学生もいます。言葉が通じなくても、他人に対する関心、異なる文化への興味があれば十分なのです。食べ物や旅、スポーツへの興味から理解を深めていくのもいいでしょう。

留学生とかかわる機会としては、チューターになったり、研究室やクラスで一緒になったりと色々です。友達のさらに友達という感じで、輪が広がっていくこともあります。海外に行かなくても国際交流や異文化理解は可能なのです。留学生の友達ができたことがきっかけで、実際に海外に行ってみたという人います。日立での国際的な生活は、皆さんの視野を大きく広げてくれるはずです

ひたち国際文化まつりのバングラデシュのコーナーで、学部学生、大学院生が、美味しいカレー（チキンとビーフ）の販売や、民族衣装の紹介を行っていました

国際協力研究プロジェクト フィリピン・土壌水管理局 ―ピナツボ火山泥流による被害地予測―

農学部　教授　吉田　正夫

フィリピン・土壌水管理局は、土壌・肥料・植物栄養学の基礎研究を基に農民のための作物生産性向上技術を開発に重きを置いている。

そこで、現地農民の受け入れ可能な作物生産性向上技術の開発を目指して、独立行政法人・国際協力機構（JICA）とフィリピン・土壌水管理局との間で国際協力研究プロジェクト「土壌研究開発センター・プロジェクト」が一九八九年から開始され、現在は、「農民参加によるマージナルランドの環境及び生産管理計画プロジェクト」が継続中である。プロジェクトの研究協力項目は一・土壌調査、二・土地評価、三・土壌肥料、四・土壌管理、五・普及・研修である。

この研究プロジェクト期間中の一九九一年　六月十五日にフィリピン・ルソン島中西部に位置するピナツボ火山が二〇世紀最大と言われる大噴火を起こした。この大噴火によって一センチメートル以上の降灰により被害を受けた面責は六〇万ヘクタールで、しかも噴火後の降雨による火山泥流によって五万六千ヘクタールの農耕地が火山泥流物質により埋没するという被害を受けた。

地理情報システムによる地図作成

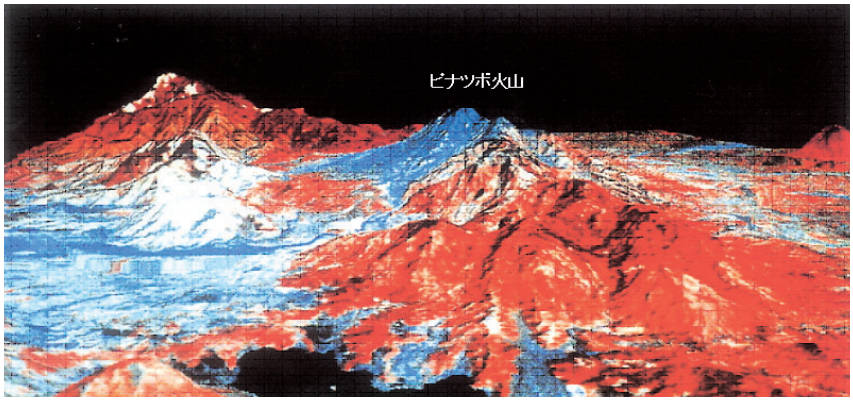
噴火直後にフィリピン・農業省から土壌水管理局へ噴火による作物被害調査、火山泥流による被害地予測の依頼があり、土壌水管理局のフィリピン人スタッフと日本人JICA専門家が共同してそれに対応した。

JICAから供与されたリモートセンシング、地理情報コンピュータシステムを用い、人工衛星写真から作成された火山泥流被害地解析図と現地調査で得られた降灰深データをコンピュータ解析し、噴火後一週間で作物毎の被害面積と被害収量の結果を出力することができた。発展途上国において、この様な被害状況データが客観的数字でしかも素早く発表されることは希である。しかも、これらの作物被害収量データはフィリピン政府の噴火翌年の一九九二年における食糧輸入の基礎データとして役立った。

特に、火山泥流による被害地予測においては、先のコンピュータシステムを用い、土壌水管理局で既に作成されていた土壌図を基にして、さらに数年間発生するであろう火山泥流による被害地予測図を噴火後一ヶ月以内に作成することができた。土壌水管理局フィリピン人スタッフと日本人JICA専門家が協力して土壌図を基に火山泥流被害地予測を行ったことは画期的であり、しかも短時間で火山泥流被害地予測図が作成されることを実証した。これには、数多くの土壌図をコンピュータに入力し、泥流発生要因の検証という膨大な作業があり、土壌水管理局フィリピン人スタッフは超勤手当ての支給もなく、夜を徹し休日もなくこれらの作業を完璧に成し遂げた。この火山泥流被害地予測図はピナツボ火山周辺の住民の非難に役立ち、農業回復政策立案に貢献している。この様な精度の高い火山泥流被害地予測図が作成された背景には、フィリピン人スタッフの長年培われた土壌学に対する研究、知識、技術の高さと豊富な経験によるものであると確信する。

リモートセンシング技術、地理情報コンピュータ技術を習得したフィリピン・土壌水管理局では、現在三次元的解析技術の研究・開発を進めており、それらの応用研究・技術はフィリピン国のみならず同じような自然環境を持つアジア諸国においても大いに貢献できるものと考えられる。

二〇〇五年十二月二十六日のスマトラ沖地震津波が発生した時、フィリピン・土壌水管理局は、未曽有の被害を出したインドネシア・アチェ州の被災地状況をリモートセンシング技術よって素早く解析し、その解析画像を基に復旧・復興が徐々に始まっていると聞いている。



人工衛星写真によるピナツボ火山泥流被害地鳥瞰図（青色：火山泥流被害地、赤色：植生）

日本そして茨城大学と私

人文学部　外国人教師　G・ドヴォ

たけき心に不可能なし

「世界の果てにある国に行ってみたいなあ～、なるべく地球の反対側に～、しかし出来るだけ同じ北半球かなあ～」。それは欧州に生まれた私の幼少時代から抱いていた夢でした。あの頃、まだ無邪気な八歳だった私の考えでは、南半球に住んでいる人々は逆立ちをして生活しているのを確信していたので、行き先の国として北半球に在る国を選びました。欧州大陸のフランス地方から見ると地球の反対側と言うと…だいたい日本に当たる。

よくよく考えてみた上で或る日、十二才になったばかりの私は、宿題をせずにハンドルに日本の国旗を飾ってあった自転車にまたがって、強くペダルを踏みながら日の出の方角に飛び立って家出しました。極東を征服するつもりでいたのですが・・・恥ずかしいことに、おやつの時間が近づいていたので十分で戻りました。仕方がなかったので、半分は元気を出させるように、半分は本当に腹が減っていたので、おやつを済ませてから、悲観しながら大嫌いな宿題にかかりました。そして、このように挫折をしてしまったその半冒険以来、何年も経ちました…。

吐息する心は望みの物を持たないしるし

「失敗を認めるけれど、やめる訳にはいかないぞ」と思っていた私は、絵本をはじめ提灯・絵・服・切手など、日本に関する色々な物品を集めはじめた（時が経つにつれて、大部分は中国の物であったことが分かりましたが・・・）。誕生日の贈り物に、いつもお母さんから日本の物を貰いました。一方、お父さんは私を「精神科医に見てもらう必要がないかな」と思っていたようだ。私の本当の体験は、小学校で初めて日本映画を見た時でした。〝腹切〟と言う題名の侍映画でした。なぜ小学校は私達みたいな小さな子供達にこんな恐い映画を見せたのか、今でも理解に苦しむ。子供向きの映画じゃなかったのは確かだと思います。

この映画の内容を忘れましたが、ただ覚えているのは、あるときスクリーン全体が血だらけになったことです。上映中に急いで外に出て嘔吐したが、また急いで自分の席に戻りました。それはこの映画の大団円を知りたかったからです。うちに帰って家族揃って夕飯を食べていたとき、「日本人って、やっぱり強いな」と言い出したので、みな変な顔をしながら私を見た。そこで私は、この映画について細かく話し始めた。特に主人公の侍が切腹した丁度その時、彼の内蔵がニョロニョロとみみずのように腹からでたとたん、スクリーンが真っ赤になったことを語ると、どんな訳か分からないが、自分の前のトマトソーススパゲッティーで一杯のお皿を見て突然、真っ白くなった弟が大声で泣きだした。するとお父さんも腹立ちまぎれに突然立ち上がって、私の髪の毛を引っ張って平手打ちしながら、私のベッドまで見送ってくれました。まだ夕食を食べ終わっていなかった私は「いつか本当に日本へ行ったら、弟を連れていってあげたい」、と自分に誓った。

待てば海路の日和あり

それ以来また何年も経ちました。時が経つにつれて、私も成長しました（少しだけ。私の身長は今でも百六十二センチしかないけど〝小ささは美の印である〟と言われているので、満足しています・・・）。ある日、私が繰り返していた単調な祈りを聞き飽きた運命の女神が、私に微笑みかける時が来た。それは二十六年前のことです。震える両手で持っていた手紙を読み終わったら、「望みが叶った！子供の頃の夢がやっと実現した！」と大喜びで叫んだ。実はその手紙は茨城大学から発送されたものでした。

遠縁の親戚の養子のよう

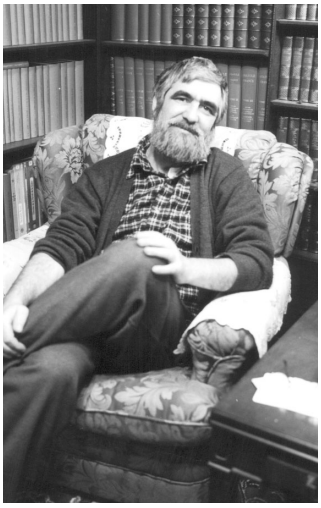
私にとって日本へ行くことは、遠くに暮らしている遠縁の親戚のところへ行くのと同じことだった。もっとも適切に言えば、まるでその親戚の養子になる様なことでした。一度もあったことがなく文通も一度もせずに、ただどこかでその人々が存在しているのしか知らなかった私は、少し不安になってきました。しかし、日本の優しさを信じて万事うまくいくと確信していた。私の日本の実験により、心配は無用だったのが証明された。

成功の鍵

年齢と二十六年間の経験が私の精神を少し円熟させたと思いたいのですが、ある三月末に雲で覆われていた水戸駅に初めて辿り着いた無邪気な私の姿を思い出すと、笑うべきか泣くべきかわかりませんが、今の私を見るとまるで別人みたい・・・。外国人教師の義務はなによりも教えることにあると思われている。しかし私の経験に従えば、教えることはこの義務のほんの一部で、大部分はむしろ学ぶことだと思います。教室にいる時だけ担当者の立場にいるけれども、授業が終わって外の世界に戻ると、もう先生ではなくて真の初心者になる。本当の先生は、その周りの一人一人の人達です。とても小さな子供からお年寄りまで皆、例外なしに「思わず生きる」技術の立派な教師である。謙遜は欠点ではないのだから、その人々の教えを真面目に聞く気があれば、大いに利益を得ることができます。

住めば都

諺にもあるように「郷に入れば郷に従え」、成功の秘訣は互に和合して暮らすところにある。それは荷が勝ちすぎていることではないのだから、誰にでもできると思います。私としては、今までどこにも切腹をしている侍が姿を現すことは一度もなかったおかげで、安心して養子の満足な生活を送り続けています。私のあこがれの日本国、有り難うございます。心から感謝します。



DEVOS GABRIEL先生

海外体験

工学部 助教授 周立波

国際化が叫ばれている今日、学生諸君は、海外との接点は団体での海外旅行程度ではないでしょうか。卒業するまでに何らかの形で海外で実際の体験をしてもらおうと、わたしが担当する研究室では、修士の学生に国際学会での発表を課しています。スケジュールの作成からホテル予約まで全部学生にやってもらいます。さらに慣れない英語で自分の研究成果を専門家の前で発表することは、並大抵の努力ではできません。大方の学生は最初は引いてしまいます。しかし、この数年間推し進めた甲斐があって、次第にその大切さが学生に理解されるようになり、今では自ら進んで希望する学生も出てきました。

また希望する学生には、外国でのインターンシップをサポートしています。これまでに二名の修士学生が、私が茨城大学赴任前に勤めたシンガポールの国立研究所で三～六ヶ月のインターンを実施しました。

左記は、一年前に国際インターンを体験した川上君の感想文です。これから茨城大学で学ぼうとする諸君に少しでも参考になれば幸いに思います。

私は二〇〇五年五月から十月初旬までの約五ヶ月間、周先生に紹介していただいたシンガポールにあるSimtech（Singapore Institute of Manufacturing Technology）国立研究所でインターンシップ（職業訓練）に参加しました。このインターンシップという形での留学を選んだ理由としては、

1 業者を通した留学ではないため手続きを自分で行わなければならないこと
2 研究をしながら英語を身につけられること
3 住居や生活費に関するサポートがあること

などが挙げられます。

したがって実際に、必要な書類や情報のやりとりはEメールを通して自分で行いました。元々英語が苦手だったために初めのうちは返信にも非常に時間がかかりましたが、徐々に英語に慣れていくことができました。現地に行ってからは、指導研究員の方とのディスカッションや発表、レポートなどを通して専門知識はもちろんのこと、「生きた英語」に触れながら勉強することができ、また日本人と外国人の表現方法の違いなども知ることができました。

留学は一般的に学費など多くの費用がかかります。しかしインターンシップでは逆にお小遣い程度の給料と住居を提供してもらえるため金銭的に大きな助けとなりました。また、様々な国から学生が集まるため、文化や習慣、考え方の違いなど勉強以外でも多くのことを学ぶことができ、このインターンシップを通して自分を成長させるために非常に有意義な時間を過ごすことができました。

（川上康友）

研究員の方や同僚とのランチにて

留学生のためのそば打ち体験

昨年度まで教育学部で実施していた「留学生のためのそば打ち体験」を今年度は本学の全留学生を対象に留学生センター・留学交流課の主催により年末の十二月二十八日（木）講堂において実施しました。

冬休み中にもかかわらず、留学生約三〇人が参加し、学長をはじめ教職員約八〇人の出席も得て、九時からそば打ちを始め、昼には講師の方にもお褒めの言葉をいただくほどの出来映えとなり、味も好評でした。

留学生センター

本学では三〇〇名近くの留学生が学んでおり、日本人学生との交流も盛んに行われています。留学生センターは、留学生に対する日本語・日本事情教育、修学・生活上の指導助言、海外留学を希望する学生に対する情報提供・助言を行うとともに、これらに関連する調査研究を行っています。

1. 留学生のため日本語教育

茨城大学留学生センターでは、さまざまな留学生を日本語研修コース研修生として受け入れ日本語教育を行っています。

- 初級から上級までの日本語クラスを開講
- キャンパス案内と水戸市内散策
- 研修旅行や文化体験授業の企画と実施
- 水戸市国際交流センターで公開発表会を実施

2. 留学生及びチューターのための支援・指導

留学生が本学の環境に慣れ、充実した留学生活を送ることができるようにさまざまな支援を行っています。

- 新入生ガイダンスの実施
- 新入生の個人面談実施
- 水戸・日立・阿見キャンパスにおけるチューター懇談会の開催

3. 海外留学の支援

茨城大学では現在9か国、計19大学・機関と大学間交流協定を締結し教員・研究者の交流、学生の交流を行っています。留学生センターでは留学に関する相談・助言を行っています。

- 海外留学説明会を年2回開催
- 個別の留学相談
- 留学情報の提供催

4. 地域との交流支援

地域住民の方や留学生支援団体と意見や情報の交換を行い、留学生も交えた地域との交流を深めています。

- 常陸大宮市国際交流協会の協力を得てホームステイを実施
- 県内高校への留学生派遣
- 地域住民との懇談会・交流会の開催催

留学生センターホームページ
http://www.isc.ibaraki.ac.jp/index.html

留学生が語る／自慢のゼミ・研究室

●人文学部　現代資本主義論ゼミナール

二〇〇一年にアメリカで起きた九・一一同時多発テロ、アフガニスタン攻撃、核問題：：

このように世の中は常に複雑な動きをみせており、それらの諸問題を正しく理解するためにはまず現代世界の仕組みを理解する必要がある。

そこで私たちの資本主義論ゼミナールでは「アメリカ」というキーワードをとり、アメリカを中心とした世界の政治・経済体制がどうなっているのかという視点からさまざまな国際諸問題をテーマに研究をしています。ゼミ生は十四名で、みんなの研究の対象国もそれぞれです。アメリカ、中国、台湾、ロシアなどと、いろいろな国の事情を知ることができます。

今は「超格差社会―アメリカ」という本を教科書として、先生とともにアメリカ社会の経済構成について分析をしています。これと限らず毎週一回、一人ずつ新聞報告があり、自分が興味をもった記事を一週間分集め、それをみんなで議論をしますが、ときには超盛り上がることも。みんな熱心でありながらものんびりとゼミを楽しんでいます。

「現代世界の仕組みを知りたい」、「アメリカについていろいろ知りたい」、「自分の国際観を広げたい」。そんなあなたをうちのゼミにきていただきたい。

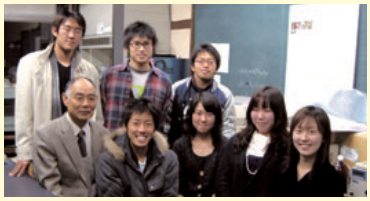
人文学部　社会科学科三年
オスマン　イミンニヤズ（中国）

●教育学部　理科教育講座　山本研究室

本研究室では、有機天然物化学や有機合成化学の領域で、有機化合物を取り扱い、新しい化合物を見つけ、どんな動きをするのかについて研究しています。「太陽の動きに逆らっては力が発揮できません。」という先生の言葉どおりに全員が太陽の動きに逆らわずに？自分の研究に日々励んでいます。

研究は山本先生と修士課程の田中さんの指導の下、三年生は、私たちの身の回りにある有機物を一つずつ選び、その成分分析を行いながら実験に慣れ、また基本的な機器分析についても学んでいます。四年生になると三年生のうちに磨いた知識や技術をもって主にヒノキ、スギ、マツなど植物の成分分析を中心とした研究を行うことがこの研究室の主な研究内容です。

週に一回行われる報告会では、個々の研究状況を発表し合い、議論することでより知識を深めるように互いに協力しながら頑張っています。その他にも飲み会や鍋などのイベントも開くなど明るくてとても雰囲気のいい自慢の研究室です。



教育学部
人間環境教育課程環境コース三年
金　泰亨（韓国）

●理学部　自然機能科学科　三輪研究室

私たちの研究室では、三輪五十二教授の指導の下、主に単細胞生物ゾウリムシを使った実験を行っています。ゾウリムシでは接合という現象を観測することで老化の仕組みを探しています。

クロレラが共生しているミドリゾウリムシではこの接合活性が二十四時間周期で現れるという特徴があります。そこで生物時計に関する実験も行っています。ボルボックスという水の澄んだところで普通に見られる生物を用いた実験も行っています。さらに、上記の生物に紫外線などを照射し、どのような損傷や回復が見られるかという事も様々の実験で検証しています。それぞれの研究で、学生が各自のテーマを持ってそれぞれ研究に取り込んでいます。

ゼミでは、週一回の外書講読などや、各自の研究についての検討も行われ、お互い意見を出し合い、研究に励んでいます。

勉強以外にソフトボール大会に参加したり、飲み会などに行ったりして、先生との仲はとても親密です。是非、私の自慢の三輪研究室を訪ねて来て下さい。

理工学研究科自然機能科学専攻
修士課程一年　張　紅艶（中国）

●工学部　機械工学科　堀辺研究室

本研究室では、弾性理論に基づく応力解析やFEM（有限要素法）と最適化手法を用いたき裂の逆解析や実用的なFEMプログラムの開発などを行っています。

弾性理論に基づいた研究テーマは、基本的な形状の弾性体の応力集中を理論解析し、強度設計の指針となるようなデータを提示するのが目的となり、FEMによる研究テーマはき裂が構造物に生じると、破局的な破壊に至ることがあり、そのき裂を早期発見し、位置と大きさを推定しようと発想しています。

学生たちが研究を進めるために必要な知識をゼミで勉強しています。ゼミは週に三回行って、主に、Mathematicaによる数値計算、C言語による有限要素法入門、そして英語を学んでいます。堀辺忠志先生のご指導の下で、学部学生でも国際会議で論文を発表したり、修士学生の論文が日本機械学会の論文集に二回掲載されたりなど、学生ひとりひとりがレベルを上げ、勉強の喜びをみんなで感じています。

研究以外にも、スポーツや文化を楽しんで、仲良く勉強環境を創造して、学生生活を明るく過ごしています。本研究室は、自分に自信がある方、未来に希望を持つ方が夢を実現できる場所だと感じています。興味がある方は、一度見学にいらして下さい。

理工学研究科
博士前期課程
二年
白　金山（中国）

留学生が語る／自慢のゼミ・研究室

●農学部　分子遺伝学研究室

本研究室では、三十五億年前に地球の原始大気に酸素をもたらした原核生物シアノバクテリア（ラン藻）を主な研究材料として扱っています。我々はシアノバクテリアの生産する新規二次代謝産物合成遺伝子の同定や生合成機構の解明や転写制御機構、特に光合成遺伝子に注目して研究しています。

メンバー全員ががんばり屋で、毎日しっかり実験を行っており、毎年国内・海外の学会で研究成果を発表しています。私も昨年アメリカの学会で発表することが出来ました。研究以外でも、ゼミ旅行、ソフトボール大会、コンパなどのイベントを定期的に行っており、コミュニケーションをしっかり取っています。その中で、自分が話を理解できない時、みんなが丁寧に教えてくれます。研究室にいることで日本語の勉強とともに、日本の文化と深くふれあうことが出来ます。笑い声絶えない、元気いっぱいの分子遺伝学研究室にぜひ一度見学しに来てください。

農学研究科修士課程一年
李　晨瑤（中国）

●教育学部　岩佐ゼミ

一言で言えばゼミは皆で楽しく勉強も遊びもできる場です。

岩佐ゼミにはマス・メディアを中心とした分野に関心を持った学生が集まっています。現在は各々の卒論研究の内容について報告し合い、お互いに議論を行っています。ゼミはとても自由な雰囲気で活発に議論ができる場です。留学生として初めてゼミに参加した時、私は日本語を聞き取ることに精一杯で、ゼミはどういう流れか、何について議論しているのかさえも分かりませんでした。先生とメンバー達がそれに気づいてくれて、わかりやすく説明してくれるようになりました。それで、時々楽しい日本語ゼミになってしまいます(笑)。このような中であっという間に一年近く経ちました。私はすっかりゼミに慣れました。また皆で各自の研究について議論する中で、自分の研究の筋道や流れもだんだん見えてきて、確実に勉学が進んでいると感じています。

ゼミでは飲み会や合宿も行っています。飲み会では教師学生を問わず、飲めない人は無理に飲まない、みんな個性豊かで自由な雰囲気が楽しめます。今秋のゼミ合宿は一泊二日の日程で古い別荘を借りて行いました。夕食はみんなで作りましたが、結果的に中国の餃子講座になっていました。もちろん講師は私でした。日本の昔の民家生活が味わえて、日中の食文化交流もできて本当に楽しい合宿でした。

教育学部情報文化課程
チン・エン(中国)

●理学部　数理科学研究科　高野研究室

数理科学科の高野勝男研究室では、解析と確率論に関係する分野を研究している。近年は確率論などと関連して理論的・応用的に興味のある問題が提起され、研究の重要性が高まっている。その理論は数学のためにしか役に立たない思う人も多いかもしれない。しかしながら、数学者が心から意義深いと感じる数学的な構造は必ず実世界にその表現を持っている。

現在、研究室で取り使うテーマについて一週間二回ぐらいゼミを行い、難しい理論を見つけて高野先生にわかりやすく教えてもらう。なかなか長い時間がかかるが、その内容を研究室のメンバーと一緒に議論することを通じて、全員が理解できるようになり嬉しく感じている。

私にとっては高野研究室が，生涯生きていく上での学習の大切さと友人という宝物を与えてくれたところだと思っている。

理工学研究科博士前期課程二年
ドディ・デヴィアント（インドネシア）

●工学部 知能システム工学科）　江田・周・尾嶌研究室

私たちの研究室は知能システム工学科「設計生産システム講座」に所属し、主に加工系の研究室です。マイクロ～サブナノメートル領域におけるものづくりすなわち超精密・微細加工を主な研究対象としており、そのための装置や技術の開発、現象の究明、評価等に関する研究を行っています。

個性豊かな先生方には、武士道が好きな江田先生、ギャンブルが好きな周先生、ゲームが好きな尾嶌先生にご指導を頂いています。

また、私たちの研究室では多くの学生(約二十五人)が所属し、週二回のゼミを意見交換の場として与えられ、楽しくコミュニケーションをとりながら研究を進めています。また、さまざまな国籍のメンバーも所属しています。周先生(シンガポール)をはじめ、私(イラン)と他に中国人研究員もいます。よって国際交流も深めることができ、国際学会も積極的に参加しています。

さらに、研究室のイベントが盛り沢山です。四月は花見、八月はバーベキュー、十二月は忘年会、三月は送別会などがあります。

理工学研究科博士前期課程一年
Bahman Soltani(イラン)

INFORMATION
茨城大学からのお知らせ

茨城大学熱気球同好会が第三十回熱気球琵琶湖横断レースで優勝

本大会は、日本におけるスポーツ熱気球の創生期から続く伝統ある全国大会です。本年度は十二月二十三日に滋賀県高島市で開催され、日本全国から エントリーした二十二チームの中で、本学熱気球同好会が気球「ナスカ」を操り見事に優勝しました。熱気球同好会は毎週末に古河市近郊の渡良瀬遊水池でフライトトレーニングを行っており、その成果が現れた形です。熱気球同好会の今後のさらなる活躍を期待します。

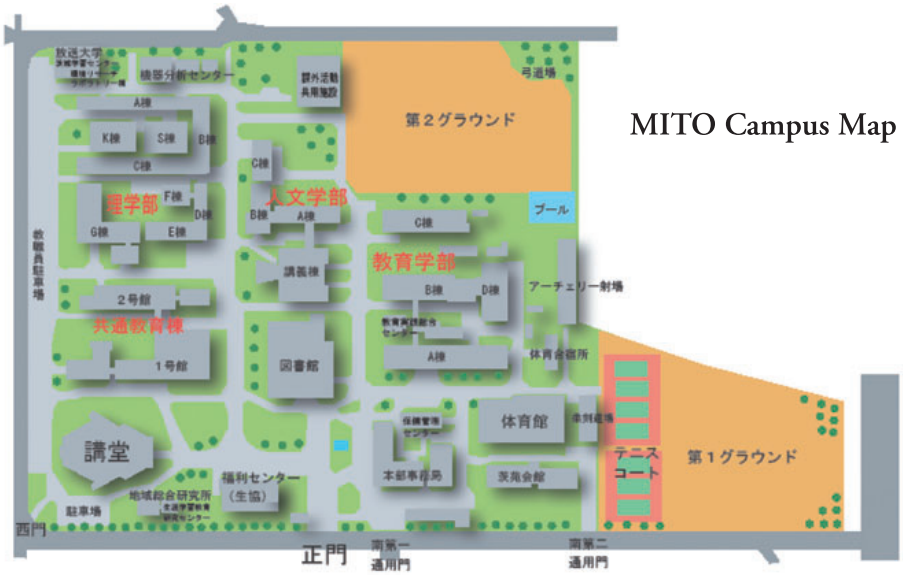
第四回Word Material Day Awardの第3部門を受賞

工学部の鋳造クラブ（学生・大学院生　十二名）が、昨年十一月一日（社）日本金属学会より第四回Word Material Day Awardの第三部門を受賞しました。

本賞は、「材料に関する知識とその重要性を社会や若者に啓発する活動」に貢献した学生に与えられるもので、鋳造クラブは、夏休みなどに小中学生や高校生を対象としたものづくり教室を開き、青少年に金属材料への興味、重要性を喚起したとして、今回の受賞となりました。

編集後記

本大学には各国留学生が多数学んでおり、各国に留学する学生も多く、それらを留学生センターがサポートしています。また多くの教員が国際交流を行い、外国人の教員も少なくありません。こうした本大学の国際面を本号で特集しました。



●茨城大学ニュースレター「大きな百合の木の下で」13号　平成十九年三月発行
●編集・発行　茨城大学PR委員会ニュースレター編集部
●〒三一〇―八五一二　茨城県水戸市文京二丁目一番一号　電話：〇二九―二二八―八〇〇八
●「大きな百合の木の下で」は茨城大学ホームページにも掲載されています。http://www.ibaraki.ac.jp/